

地方出身女性の進路選択とその要因 —富山県の進学校出身者を事例に—

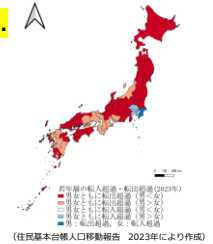
12110085 武内和奏

1

問題の所在

「地方からの女性の流出」が話題に。

- 【原因として考えられるもの】
- 働きがいのある仕事の無さ
 - 女性としての役割
 - 閉塞感
 - 古い考え方や風習 など…



2

地方出身女性の進路選択と移動

地方出身女性特有の傾向

- 「居住地から通える範囲の大学」という制限(寺町, 2022)
- 実現可能性が高く手堅いキャリアである医療や教職を選択するという**女性特有の傾向**(伊佐, 2021)
←中澤・神谷(2005)で示された金沢と横浜の例
ジェンダー差よりも地域差の方が大きい(中澤ほか, 2006)

3

地方出身女性と「閉塞感」

「女性」という性役割に縛られるがため、自分の理想のライフコース歩めない＝**閉塞感**？

- 「男性は外で働き、女性は家庭を守る」
→**女性の職業達成、教育達成の重要性が下がる**(神林, 2000)
- 「家庭責任を引き受けざるをえないため家庭との役割調整を行いながら断続的な就業パターンをとる、という制度化されたライフコースは今なお優勢」(中井, 2011)

4

研究目的

地方出身女性、特に進学校出身者個人の進路選択に影響を与える要因を明らかにする。

特に「地方に残る」という選択をした女性と、「地方から出る」という選択をした女性の間に生じる差異について分析していきたいと考える。

5

研究対象①

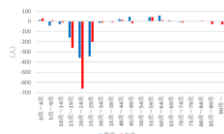
【研究対象】富山県立高岡南高等学校の卒業生10名

なぜ「富山県」？「高岡南高等学校」？

1. 若者の転出超過、特に**若年層の女性の流出**が大きな課題
2. 進学校出身者ほど富山県外に転出する傾向がある
3. 高岡南高校の校風（**女子の多さ、県内進学**の多さ）

6

研究対象②



1. 年齢階級別富山県の転出超過
(2023)
(住民基本台帳人口移動報告 2023年により作成)



2. 富山県内高校の進学実績
(みんなの高校情報、各高校のホームページにより作成)

調査方法

1. 聞き取り調査 (全員)
2. 聞き取り調査を元に行った
インタビュー調査 (A, B, C, D, Eの5名)

なお対象者は、2021年3月に卒業している。

聞き取り調査対象者一覧 (聞き取り調査により作成)		
調査対象者	大学所在地	就職地
A	愛知県	富山県外
B	広島県	富山県外
C	富山県	富山県
D	富山県	未定
E	富山県 (長野県)	富山県外
F	新潟県	富山県
G	愛知県	富山県外
H	東京都	富山県外
I	東京都	富山県外
J	石川県	富山県外

7

8

調査結果の概要

富山県外の大学を選択した理由 (聞き取り調査、インタビュー調査により作成)	
一人暮らしがしたい (A, B, E, G)	
就職に出たい (B, H)	
新しい生活がしたい (E, I)	
その他	親戚のある学部学科がある大学がない (A) 前期試験で合格したい (F) 実家を出たい (J)

富山県が就職する地として積極的に選ばれてないというよりも、他県の方が彼女たちにとって魅力的であるため富山県外が就職する土地に選択された。

富山県外に就職する理由 (聞き取り調査、インタビュー調査により作成)	
A	富山県での生活の不慣れ (交通網など)
B	ジョブ型雇用制度 愛知県の雇用状況の悪化
C	富山県内就職の難さ (伊あるイメージ) 県外で過ごしたいため
E	親戚の人間関係の悪化 自分の成長、自分らしい生活をするため
G	愛知県での生活の慣れ (交通網など) 大学で学べる人間関係の構築
H	ホストになりたいため
I	東京での生活の充実感
J	実家に居るたくないため

インタビュー調査の結果①

「富山県から出る」者と「富山県に残る」者の共通点

- 対象者の両親が、多少の制限はかけるものの、基本的には子どもの希望する大学への進学を望んだ点
- 最も多いのが「国公立大学であるならばどこでも」
- 既存研究で見られたような制限がなくなったため、対象者たちは自由に進学できたのでは？

9

10

インタビュー調査の結果②

「富山県から出る」者と「富山県に残る」者の相違点①

- 富山県から出た者が富山県での生活に何かしら不満を抱えていた点
- A「コミュニティの閉塞感」
- B「産業構造に対するマイナスなイメージ」
- E「既存の人間関係」

インタビュー調査の結果③

「富山県から出る」者と「富山県に残る」者の相違点②

- 富山県から出た者の方が、今後の理想のライフコースが明確である点
- A→恋人と将来について話すこともある
- B, E→結婚や出産のタイミングで富山県に戻りたい
B「途中で都会に戻りたい」
E「そのまま富山で過ごしたい」

11

12

考察①

「富山県外への進学」＝富山県から脱出する手段？

- ・ A 「富山県内に興味のある学部学科がある大学がない」
⇒富山県でも言語を学べる、留学支援もあり
- ・ B →都会への憧れ、富山県で就職したくない
- ・ E →若いうちにさまざまな経験がしたい

13

考察②

「女性」としての役割に囚われていない？

一見「閉塞感」がないように思われるが…

- ・ B 「製造業は男性中心の産業で、女性には萎縮しているイメージ」、 「男性は現場で、女性には事務員もしくは公務員」
- ・ B, E →「結婚や出産を機に富山県に戻りたい」
⇒「高学歴女性であっても結婚退職する」(中井, 2011)

14

今後の展望・反省点

- ・ このまま何の対策も講じないと、ますます転出超過、首都圏への人口一極集中が進む恐れがある。
- ・ ただし富山県も何もしていないわけではない
→女性の活躍推進委員会など、認知してもらうことが課題！
- ・ サンプルが非常に限定的であったため、偏った結果になった。

15

参考文献

- ・ 伊佐恵果, 2021, 難関大に進学する女子はなぜ少ないのか——難関高校出身者に焦点をあてたジェンダーによる進路分化のメカニズム——, 教育社会学研究 109: 5-27
- ・ 石川由香里, 2009, 子どもの教育に対する母親の地域移動効果——地域間ジェンダー格差との関わり——, 教育社会学研究 85: 113-133
- ・ 上山浩次郎, 2011, 大学進学率の都道府県間格差の要因構造とその変容——多母集団/バス解析による時点比較——, 教育社会学研究 88: 207-227
- ・ 羽谷梨枝, 安藤理, 有寿正巳・井上公人・高橋達・平本耕平・漆山綾香・中西啓喜・日下田岳史, 2008, 地方公立進学校におけるエリト再生の研究, 東京大学大学院教育学研究科紀要 47: 51-86
- ・ 榎林博史, 2000, 性別割拠場はアスピレーションに影響するか?—高校生女子のアスピレーションの規定因に関する計量的研究—, 価値と方法 115(2): 359-374
- ・ 寺町麗哉, 2022, 大学進学における「地方」と「性別」の「足枷」, 学術の動向 27(10): 76-83
- ・ 中井美紀, 2011, 女性のキャリア動向, 季刊家計経済研究 89: 11-21
- ・ 中澤高志・神谷浩夫, 2005, 女性のライフコースにみられる地域差とその要因—金沢市と横浜市の進学高校卒業生の事例—, 地理学評論 78(9): 560-585
- ・ 中澤高志・神谷浩夫・木下香子, 2006, ライフコースの地域差・ジェンダー差とその要因—金沢市と横浜市の進学高校卒業生を対象に—, 人文地理 56(3): 78-96
- ・ 山内マリコ, 2012, 『ここは退職迎えに来て』幻冬舎

16